

書籍における他動詞文の無生主語率について

ージャンルの違いを考慮してー

岑慧穎（京都外国語大学大学院）

Inanimate Subject Rates in Transitive Sentences in Japanese Books: Considering Genre Differences

Huiying CEN

Kyoto University of Foreign Studies

要旨

本研究は、現代日本語における無生主語他動詞文の使用実態をジャンル間で比較し、その傾向を明らかにすることを目的とする。『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）の出版書籍および図書館書籍を対象に、文学を除く九つカテゴリーから無生主語および有生主語の他動詞文を抽出し、ロジスティック回帰分析と調整頻度に基づく階層クラスタ分析を行った。ロジスティック回帰の結果、ジャンルによって異なる傾向がみられた。また、調整頻度に基づく階層クラスタ分析からも、ジャンル間の類似性と相違性が示された。これらの分析を通じて、無生主語他動詞文の使用実態をジャンルの観点から検討することの意義を示す。

1. はじめに

日本語には無生主語他動詞文が存在している。

- (1) ギャラリーが呼吸を始めたような感じになりました。[PB23_00419] .
- (2) 台風がアメリカを襲った。（作例）

例（1）は、無生物の「ギャラリー」に「呼吸を始めた」という有生的な動作を付与した擬人化表現である。一方、例（2）は自然現象による出来事をそのまま叙述したもので、修辞的操作は見られない。

これら無生名詞が主語に立つ他動詞文の許容条件については角田（1991）のように Silverstein（1976）の名詞句階層に基づいたものや、Langacker（1991）や山梨（1995）などによる認知的視点に立ったものや、斎藤（2003）が援用した Kuno & Kaburaki（1977）、久野（1978）、Kuno（1987）の視点理論など、多角的に論じられてきた。さらに、修辞法（Lakoff & Johnson, 1980）、翻訳調（金田一, 1981）、他動性（熊, 2009）といった各種の特徴も指摘されている。

しかしながら、主語の有生性を考慮したうえで、無生主語他動詞文の出現傾向がジャンルによってどのように異なるのかについては、十分に検討されているとはいえない。そこで、本研究は以下の二点の問題に答えることを目的とする。

- ①他動詞文全体における無生主語の占める割合は、ジャンルによって異なるか。
- ②無生主語他動詞文は、異なるジャンルにカテゴリー間の類似性と相違性があるのか。

2. 先行研究と問題点

従来の他動詞文の量的研究においては、無生主語他動詞文の位置づけはほとんど扱われてこなかった。この状況を踏まえ、近年では無生主語他動詞文に着目した研究が徐々に増えている。たとえば、麻（2024）は、プログラム処理を用いて、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』から無生主語他動詞文を抽出し、レジスターおよびジャンルの違いを考慮した上で、分析を行った。しかし、麻（2024）では有生主語他動詞文を対象としていないため、無生主語が全他動詞文に占める割合を算出することはできなかった。また、研究対象は対格名詞が物名詞に限定されており、物名詞以外の対格名詞をとる事例は考慮されていない。

一方、他動詞文における無生主語と有生主語の出現頻度を比較した研究として、玉岡他（2019）が挙げられる。玉岡他（2019）は『CD-毎日新聞データセット』（本社版、1998–2015年）を用い、32組の自他動詞対応関係をもつ動詞対について計量言語学的分析（t検定）を行った。その結果、他動詞構文における主語の有生性（無生／有生）は、出現頻度に有意な影響を与えないことが示された。ただし、この結論はニュース報道という単一の語体に基づくものであり、一般化には限界がある。ニュース語体は社会的事象や客観的事実の報道に偏るため、こうした文体的特性が結果の一般性を制約している可能性がある。

異なる文体を考慮したアプローチとして、岑（2026）は『現代日本語書き言葉均衡コーパス』、『日本語話し言葉コーパス』、『昭和話し言葉コーパス』、『日本語日常会話コーパス』『名大会話コーパス』を用い、無生主語他動詞文率をレジスター別に使用実態を調査した。その結果、ロジスティック回帰分析から、硬い文体では無生主語他動詞文の割合が高く、一般線形モデル（GLM）による分析からは、書籍類文学ジャンルにおいて調整頻度が最も高いことが明らかになった。しかし、岑（2026）の調査対象は出版書籍および図書館書籍の文学ジャンルに限られている。そこで本研究では、主語の有生性とジャンルの差異に着目し、出版書籍および図書館書籍における他動詞文の分布と特徴を考察する。

3. 調査方法

3.1 調査コーパスと検索式

本研究では、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）を用い、出版書籍および図書館書籍を対象に、無生主語・有生主語の他動詞文の分布を調査した。検索条件は、検索キーを名詞、共起語1を助詞「が」、共起語2を名詞、共起語3を助詞「を」、共起語4を動詞とし、「NがNをV」の構造を指定した。前後文脈は30語、レジスターは出版書籍・図書館書籍とし、その他の設定はデフォルトとした。コーパス例を引用する際は、例文末尾にサンプルIDを付記した。

3.2 無生主語他動詞文の判定

無生主語他動詞文の判定基準については、岑（2024:7）が示す基準を採用した。

第一、主語として用いられる無生名詞が他動詞文の主語でない場合は、研究対象に含めない。第二、目的語が動作の対象でない場合は、無生主語他動詞文とみなさない。第三、補助動詞としての「する」を含む動詞文は、無生主語他動詞文と認定しない。

本研究では、用例数の増加を踏まえ、第1・第2の基準は維持し、第3の基準を一部修正

した。具体的には、「する」は語義上の実質性が低いため、補助動詞として用いられていない場合も含め、「NがNをする」の用例を統計対象から除外した¹。表1に、無生主語他動詞文の例を示す。

表1 無生主語他動詞文の使用例

ジャンル	使用例
総記	• いかにも涼しげな<u>花々が屋敷を飾っていた</u>… [PB40_00094] • 知識を操作して推論を行う<u>システムが人気を呼び</u>… [LBc0_00008]
哲学	• また第二部のはじめの「同情者たち」では次のような<u>語句が目を引き</u>… [PB51_00042] • それによって<u>悟りが影響を受ける</u>ということはない… [LBp1_00010]
歴史	• たしかに、<u>啓蒙主義が小説を生んだ</u>と言うのは正しくない… [PB42_00275] • やがて<u>政局が変化を兆し</u>、西南戦争を迎える… [LBt2_00001]
社会科学	• もしアメリカの<u>衛星が攻撃を受け</u>、機能が止まってしまうことになれば… [PB43_00224] • だから八十四年に入って<u>景気が底を打ち</u>、弱いながらも上昇局面に入ると事態は急転する… [LBa3_00006]
自然科学	• 無農薬栽培や<u>有機農法が注目を集める</u>ようになりました… [PB44_00193] • 奈良時代に伝来し、<u>ヨーロッパ医学が人気を集めはじめた</u>幕末に… [LBq4_00046]
技術・工学	• <u>先願発明の特許を受ける必要はなく</u>… [PB45_00231] • <u>溶剤が髪を溶かして髪が細くなる</u>という悪評もありました… [LBs5_00043]
産業	• 商品本位の地道な<u>営業が実を結ぶ</u>… [PB46_00059] • <u>その軌道が国道を横切って</u>山間へ入り、国道から遠ざかった… [LBp6_00025]
芸術・美術	• 高い難易度ゆえの<u>達成感がユーザーを惹きつける</u>… [PB47_00067] • 高台畳付の露胎が赤く焦げ、<u>釉色が緑みを増して</u>… [LB07_00012]
言語	• ともかくもこれには「ゴ」という古い<u>語が基底をなす</u>ことだけは想像せられ… [PB48_00016] • たったひと言、たったひと<u>声が運命を変える</u>… [LBt8_00003]

¹ 本稿では、検索条件として短単位を用いた。また、本稿で設定した検索式では、以下に示す他動詞文のパターンを網羅できていない。

A：格助詞が必ずしも出現しない場合。

B：「NをNがV」のような構文。

C：格助詞ヲの直前に現れる名詞が2単位以上から成る複合名詞の場合（例：株式相場）。

D：ガと名詞の間、あるいはヲと動詞の間に連用修飾成分（例：ゆっくり）が挿入される場合

E：短単位の品詞大分類で動詞となるのは和語動詞（例：出す）と漢字一字の混種語サ変動詞（例：奏する）だけであり、二字漢語サ変（例：発表する）や外来語サ変動詞（例：ゲットする）が除かれてしまう。

4. 調査結果

4.1 原始頻度とロジスティック回帰分析結果

本稿で用いたコーパスは、国立国語研究所（国語研）が構築した BCCWJ（現代日本語書き言葉均衡コーパス）であり、出版サブコーパスと図書館サブコーパスを対象とした。これらのデータは日本十進分類法（NDC）に基づき、総記、哲学、歴史、社会科学、自然科学、技術・工学、産業、芸術・美術、言語、文学、分類なしに分けることができる。

しかし、「分類なし」は、複数の異なる性質をもつデータが混在しており、母集団としての均質性が十分に確保されていない可能性がある。そのため、本研究では、「分類なし」ジャンルを分析対象から除外し、各ジャンル間の比較を行うこととした。また、出版書籍および図書館書籍のうち、文学ジャンルに関するデータはすでに岑（2026）で扱っているため、本研究では重複を避ける目的から、文学ジャンルを除いたデータを分析対象とする。

表 2 には、出版書籍における各ジャンルの無生主語他動詞文、有生主語他動詞文およびその他の文型の出現頻度がまとめられており、各ジャンルの例文数も示されている。

表 2 出版書籍を調査した結果

ジャンル区分	無生主語他動詞文	有生主語他動詞文	その他	合計
総記	33 例	101 例	37 例	171 例
哲学	102 例	291 例	70 例	463 例
歴史	172 例	534 例	108 例	814 例
社会科学	376 例	980 例	266 例	1622 例
自然科学	211 例	217 例	79 例	507 例
技術・工学	158 例	155 例	55 例	368 例
産業	79 例	149 例	57 例	285 例
芸術・美術	122 例	362 例	83 例	567 例
言語	29 例	51 例	11 例	91 例

表 3 には図書館書籍におけるジャンルごとの無生主語他動詞文、有生主語他動詞文およびその他の文型の出現頻度が示されており、各ジャンルおよび全体の合計もまとめられている。

表 3 図書館書籍を調査した結果

ジャンル区分	無生主語他動詞文	有生主語他動詞文	その他	合計
総記	40 例	76 例	28 例	144 例
哲学	115 例	314 例	82 例	511 例
歴史	228 例	661 例	191 例	1080 例
社会科学	401 例	986 例	315 例	1702 例
自然科学	147 例	228 例	90 例	465 例
技術・工学	122 例	147 例	78 例	347 例
産業	55 例	133 例	53 例	241 例
芸術・美術	157 例	424 例	135 例	716 例
言語	12 例	46 例	27 例	85 例

出版書籍および図書館書籍を対象としたデータを用いてロジスティック回帰分析の結果、ジャンルは有生性に対して有意な影響を示した ($Wald\chi^2 = 198.669, df = 8, p < .05$)。参照カテゴリー（言語）と比較すると、自然科学 ($p < .05, Exp(B) = .525$) およびジャンル(技術・工学) ($p < .05, Exp(B) = .456$) において、有生名詞を主語とする他動詞文が現れるオッズが有意に低かった。一方総記、哲学、歴史、社会科学、産業、芸術・美術については、参照カテゴリー（言語）との間に有意な差は認められなかった。

4.2 調整頻度と階層クラスタ分析の結果

コーパス内の各ジャンルの規模に関しては、参照可能な公開資料は見つかっていないが、呉（2016:103）には、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）における書籍のジャンルごとの短単位数が記録されており、関連データは表4の通りである。

表4 各ジャンルの規模

ジャンル区分	出版書籍	図書館書籍	合計
総記	772,760	624,450	1,491,304
哲学	1,507,725	1,484,705	3,301,644
歴史	2,520,070	3,179,128	5,919,207
社会科学	7,359,793	5,870,947	13,642,628
自然科学	2,701,476	1,737,772	4,498,909
技術・工学	2,342,557	1,641,476	4,078,714
産業	1,234,687	950,369	2,225,403
芸術・美術	1,708,758	2,170,715	4,077,384
言語	492,975	447,808	982,836
文学	6,802,589	11,147,690	20,139,265
分類なし	1,108,893	1,122,803	2,315,113
合 計	28,552,283	30,377,863	62,672,407

各ジャンルに対応する短単位数の規模を基に、無生主語他動詞文の調整頻度を算出した。

表5 各ジャンルの調整頻度

ジャンル区分	出版書籍における無生主語 他動詞文の調整頻度	図書館書籍における無生主 語他動詞文の調整頻度
総記	42.7 例	64.06 例
哲学	67.65 例	77.46 例
歴史	68.25 例	71.72 例
社会科学	51.09 例	68.3 例
自然科学	78.1 例	84.59 例
技術・工学	67.45 例	74.32 例
産業	63.98 例	57.87 例
芸術・美術	71.4 例	72.33 例
言語	58.83 例	26.8 例

表 5 は、各ジャンルにおける無生主語他動詞文の調整頻度を示したものである。表 5 から分かるように、自然科学では書籍において比較的高い値を示しているのに対し、総記および言語では相対的に低い値を示した。

次に階層クラスタ分析の結果、対象とした 9 カテゴリーは、カテゴリー間の類似性に基づき、大きく 3 群に分類された。第 1 群は歴史、技術・工学、芸術・美術、哲学、自然科学から構成され、第 2 群は総記、社会科学、産業から構成された。一方、言語は他のカテゴリーとは異なる独立した群を形成しており、他のカテゴリーとの類似性が相対的に低いことが示された。このことから、無生主語他動詞文の調整頻度にはカテゴリー間で一定の類似性が認められる一方、言語カテゴリーでは他のカテゴリーとは異なる特徴的な傾向がみられることが示唆される²。

5. まとめ

本研究では、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）の出版書籍および図書館書籍を対象として、無生主語他動詞文の使用実態をジャンル間で比較した。ロジスティック回帰分析の結果、カテゴリーは主語の有生性と有意に関連しており、自然科学および技術・工学では、参照カテゴリーである言語と比較して、有生主語をもつ他動詞文の出現傾向が有意に低いことが示された。一方、その他のカテゴリーでは、言語との間に明確な差は認められなかった。また、各カテゴリーの規模を考慮した調整頻度に基づく階層クラスタ分析では、対象とした 9 カテゴリーは大きく 3 群に分類された。歴史、技術・工学、芸術・美術、哲学、自然科学が一つの群を形成し、総記、社会科学、産業が別の群を形成した。一方、言語は他のカテゴリーとは異なる独立した群を形成し、無生主語他動詞文の調整頻度において特徴的な傾向を示した。以上の結果から、無生主語他動詞文はジャンルによって一様に使用されているのではなく、無生主語他動詞文の使用割合および調整頻度の両面において、ジャンル間に一定の差異が存在することが示唆された。今後の課題として、検索式の精緻化により、さらに詳細な分析と考察を行う。

² 文学ジャンルを除く一般線形モデルによる分析の結果、ジャンルの主効果は有意ではなかった ($F(8, 9) = 2.463, p > .05$)。したがって、ジャンルによって調整頻度に統計的に有意な差は認められなかった。一方、文学ジャンルのデータを排除せずに、各ジャンルにおける調整頻度の差を検討するため、一般線形モデルによる分析を行った。その結果、ジャンルの主効果は有意であった ($F(9, 10) = 6.777, p < .05$)。以上の結果を踏まえ、本節では階層クラスタ分析を行い、統計的な有意差の有無だけでは捉えきれないジャンル間の調整頻度の傾向と、各ジャンルの類似性について検討した。

文 献

- Lakoff, G., & Johnson, M. (1980). *Metaphors We Live By*. University of Chicago Press.
- Langacker, R. W. (1991) *Concept, image, and symbol*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Kuno, S. and E. Kaburaki. (1977) *Empathy and Syntax*, *Linguistic Inquiry*, 8: 627-672.
- Kuno, S. (1987) *Functional Syntax: Anaphora, Discourse and Empathy*. Chicago: University of Chicago Press.
- Silverstein, M. (1976). Hierarchy of features and ergativity. In Dixon, Robert. M. W. (ed.) *Grammatical Categories in Australian Languages*: Canberra: Australian Institute of Aboriginal Studies: 112-171.
- 金田一春彦 (1981) 『日本語の特質』 東京: 日本語放送出版協会.
- 久野暉 (1978) 『談話の文法』 東京: 大修館書店.
- 熊鷹 (2009) 『鍵がドアをあけた』 笠間書院.
- 呉琳 (2016) 「BCCWJ を用いた基幹慣用句の選定」 『北海道大学文学研究科』 16: 99-113.
- 斎藤伸治 (2003) 「視点と日本語の無生物主語」 『Artes liberales』 72: 43-54.
- 岑慧穎 (2024) 「日本語の話し言葉と書き言葉における無生名詞が主語に立つ他動詞文の使用率の比較について」 『新長崎学研究センター紀要』 4: 3-20.
- 岑慧穎 (2026) 「日本語における他動詞文の無生主語率の調査について—レジスターの違いを考慮して—」. 『比較文化研究』 163: 193-204.
- 玉岡賀津雄, 張婧禕, 牧岡省吾 (2019) 「日本語は無生名詞主語の自動詞文が好まれる言語か?—日本語文の主語となる有生・無生名詞の頻度比較—」 『日中言語対照研究論集』 21: 124-141.
- 角田太作 (1991) 『世界の言語と日本語』 (2009 年改訂版) くろしお出版.
- 山梨正明 (1995) 『認知文法論』 (日本語研究論叢, 第 2 期第 1 巻) ひつじ書房.
- 麻子軒 (2024) 「日中における無生物主語他動詞文の使用実態調査: レジスターとジャンルに注目して」 『現代日本語研究』 15: 43-60.

関連 URL

国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(バージョン 2021.3, 中納言バージョン 2.7.2) <https://clrd.ninjal.ac.jp/bccwj/> (2026 年 6 月 30 日確認) .